

highlight

highlight(ハイライト)とは、演劇や映画などの見せ場、最も明るいところを意味する言葉。観客と劇場をつなぐコミュニケーションペーパーとして、「劇場」の可能性と京都・岡崎地域の文化芸術資源に光を当てていきます。

特集

『劇場と広場』

「搬入プロジェクト-京都・岡崎計画-」×「researchlight」トーク
危口統之、家成俊勝、川勝真一、本間智希
八角聡仁 教授による解説!

連載

highlight MUSEUM / 榎原太朗
okazaki today / 岩井秀人
はじめてのカンゲキ / 搬入プロジェクト学生プロジェクトメンバー
わたしと京都会館 / 小西裕紀子、足立充宏



KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2016 SPRING researchlight「河童よ、ふたたび」
2016.3.5(土)- 27(日) | ロームシアター京都 ローム・スクエア |
3月26日、国際的に活躍するトップスケーターの宮城豪さんが展示空間を活かしたデモンストレーションを披露。
撮影：荒川晋作

劇場と広場



researchlight 「河童よ、ふたたび」

2016.3.5(土) - 27(日)

ロームシアター京都が位置する岡崎地域の生活に溶け込んだ様々なもの=インフラ(平安神宮の屋根、小川にかかる橋、信号機の電源盤、自動販売機など)を原寸大で木製オブジェとして製作、ローム・スクエアにランダムに配置した。3週間の会期中、徐々に物体のかたちや配置を改変させながら、何気なく見ている地域の景色、ものとの新たな関係を探った。

コンセプト・製作・展示: UMA/design farm + dot architects
映像: 松村康平

写真 / 衣笠名津美



155 搬入プロジェクト —京都・岡崎計画—

2016.3.5(土) - 27(日)

ある空間に入らなそうでギリギリ入る巨大な物体を設計、製作し、それを文字どおり搬入するパフォーマンス作品「搬入プロジェクト」を、ロームシアター京都では初めての市民参加型の事業として開催。のべ2,000人を超える観客、参加者とともに搬入を行い、その後、搬入物はプロジェクトの記録とともに、3月27日までローム・スクエアに展示された。

演出: 危口統之(悪魔のしるし)、設計: 石川卓磨(悪魔のしるし)、グラフィック・デザイン: 宮村ヤスヲ(悪魔のしるし)、映像・展示ディレクション: 山城大督、リサーチ: RAD、WEB: 増本泰斗、プロダクションマネージメント: 岡村滝尾(悪魔のしるし)、ほか

写真 / 井上嘉和 1 2 3、山城大督 4 5



「劇場と広場」を考えるために

ロームシアター京都の中庭にあたる、ローム・スクエアを活用して行われた、ふたつのプロジェクト。一見してよくわからない構造物、オブジェが並んでいるような景色のようであり、子どもをはじめとする多くの人を惹きつける磁力を発していました。「搬入プロジェクト」と「researchlight」、それぞれのプロジェクトを担ったメンバーが顔を合わせたトークイベントでは、どんなことが話し合われたのでしょうか。その内容を再構成してお届けします。

【登壇者】 危口統之(演出家/悪魔のしるし)、家成俊勝(建築家/dot architects)、川勝真一(建築リサーチャー/RAD)、本間智希(建築史・都市史研究者/RAD)
【司会】 島貴泰介(美術ライター、編集者)

ナンセンスに、京都らしく

—悪魔のしるし「搬入プロジェクト—京都・岡崎計画—と、researchlight「河童よ、ふたたび」は、それぞれが京都岡崎エリアの都市空間をリサーチした成果を立体物として提示するというプロジェクトで、KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭2016 SPRINGの会期中、ロームシアター京都内のローム・スクエアに、一種のオブジェとして設置されていました。私は一週間ほどロームシアター京都内に常駐していたのですが、平日の夕方や休日になると、大勢の子供たちがどこからともなく集まってきて、これらをアスレチック遊具代わりにして遊ぶ、という風景を毎日目にしてきました。劇場とは市民のための公共空間ですが、ほとんどの場合演劇や音楽といった舞台芸術に興味のある人が利用する限定的な空間になりがちです。しかし、この期間のローム・スクエアでは、より広範に人々が行き交う即席の公共圏が現れたように思います。皆さんの目から見て、この約1か月の様子はどのようなものだったのでしょうか？

危口: 僕は普段、演劇を主に活動の場としています。「搬入プロジェクト」は、工事現場で働いていた頃、そこで日々行われる搬入作業のプロセスを作品化すれば面白かろう、お客さんも集まるだろうという発想から始まったものですが、「搬入」という行為だけを純粋に楽しんでほしいという気持ちもあって、上演後に何かを残す、という発想はまるっきりありませんでした。ただここ1年くらい、上演後の展示も含めた依頼が増えてきました。特に規模の大きかったのが2015年夏の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」でした。その時のアプローチは、搬入の様子を映像に記録して、編集やナレーションを加えた偽のドキュメンタリーにしてしまうというものでした。NHKの『新日本紀行』が取り上げるような、ある地域に昔から伝わる伝統的なお祭りを擬装したわけです。今回のプロジェクトもその延長線上にあります。自分は展示に関してはやっぱり素人だな、というのを痛感しています。RADの川勝さん、本間さん、映像を担当した山城大督さんの協力を仰いでようやくかたちにできたという感じで。いまだに「残す」ってことに関しては自分自身は無防備ですね。

—今回の「搬入プロジェクト」では、美術家で映像作家の山城大督さんが撮影チームを組織して、同時に7台のカメラで搬入の過程を収録・編集し、それを映像インスタレーションというかたちで展示しています。同時に、RADのお二人は、京都の様々なお祭りや「搬入プロジェクト」を比較・分析するようリサーチ成果を展示しています。

川勝: 僕らが参加するにあたってのミッションは、プロジェクトに「京都らしさ」を付与するということでした。そこで「搬入プロジェクト」が持つ構造を用いて、京都を捉え直すようなことが出来ればいいのではないかと考えました。

本間: 「搬入プロジェクト」本体となる計画・設計チーム、展示・記録チーム、リサーチチーム、広報チームの4チームに分かれて進めていったのですが、リサーチチームは、他のチームの議論や様子を伺いつつ刺激を受けながらも、独自に進めていきました。最初に予想していた以上にチームごとに作業が進んでいきましたが、結果的に切り離して考えて良かったと思います。

—「京都らしさを求められた」という話をしていましたが、これまで行われてきた大半の「搬入プロジェクト」は、特定の意味を持たない構造物をなんとかして空間に持ち込むという、ある種のナンセンスさを備えたプロジェクトです。そこに京都独自のサイトスペシフィティを持ち込むというのは、新しい試みですね。

川勝: その手段として、京都の祭礼と「搬入プロジェクト」をモノが移動するという点に注目し、相対化していきました。「搬入プロジェクト」的な視点で京都の祭りを捉え直すと、どういう風に祭りが見えてくるか、という。

本間: そのために祇園祭や葵祭など京都の祭礼の巡回ルートはかなりリサーチしましたね。資料や地域住民への聞き取りなど、フィールドワークをする裏付けを周到におこなうことで、説得力を担保させることを心がけました。

危口: 京都の、意味も伝統もたっぷりある祭りを、「搬入プロジェクト」みたいなナンセンスな次元まで引きずり下ろす(笑)。歴史性や文脈を剥ぎ取っちゃって、歩数や消費カロリーを換算してしまうと。

プロジェクトから生まれる風景

—搬入後の構造物が子供の遊具のように活用される風景が、自然発生的に現れたのは面白い展開ですね。

危口: ロームシアター京都は、隣接する岡崎公園との連続性が特徴的で、そこにランドマークとして構造物を設置すれば、何か別の盛り上がりを加えられるのではないかと、という期待がありました。

—今日も子供たちが大勢遊びに来ていましたが、紅白の紐で縄跳びする子がいたり、独特の遊び方を開発していました。

危口: 斜面の多い、いかにもよじりたくなるような形状ですからね。ロープを紅白にしたのは、自分なりによこしな目算があって、だいたいの日本人は紅白を見ると自動的にテンションが上がるじゃないですか。そこに鈴なんかついてシャンシャン鳴っていれば、もうそれだけで人が寄ってくるだろうと。演劇や、昨年「地域アート」と呼ばれる催しに期待される「祝祭性」は、個人的に警戒すべきものと考えていますが、自分自身、前近代的な日本人の情念を密輸入して設計しているというのが皮肉ですね。

—「搬入プロジェクト」と隣接して、家成さんたちresearchlightの「河童よ、ふたたび」が展示されています。これは岡崎公園周辺の設置物や建築の一部分を木材で再現して、設置するというものです。

家成: 「河童よ、ふたたび」はKYOTO EXPERIMENTの参加作品の一つですが、同舞台芸術祭にデザイン・建築的な文脈を加えるものという依頼を受けて始まったんですね。そこで岡崎地区を支えるインフラ、つまり道路や発電所、川や橋に注目して、見えないところで市民の生活を下支えしてくれる構造物や仕組みを提示しました。期待したのは、インフラが通常使われているのとは違う方法……例えば大人が椅子として活用するぐらいの展開だったんですが、まさかこんなに大勢の子供たちが集まるとは思っていませんでした。半ば子供たちの占拠状態で、それは嬉しいんですが、もう少し幅広い世代が活用できるようなものにしたかったというのも本音です。中学生ならこう使う、おばあちゃんならこう使う、という風に。

危口: 家成さんたちの方針には、地域の人、岡崎にゆかりのある人と中・長期的に関わっていくというメッセージ性を感じます。そういう意味では僕たちと真逆のプロジェクトですね。「搬入プロジェクト」は、初対面の人間が集まって「君、そっち持って!」と巻き込んでしまうような、なんとなくいい感じの社会モデル、ユートピアの雛形みたいなものが一瞬だけ生じるんですが、終わったらさっさと解散です。それは自分が永続的なユートピアに対して相当な疑問があるからなんです。

家成: 僕が「搬入プロジェクト」と共有できているなと思うところは、仕事の即興性でしょうか。危口さんは工事現場で荷揚げの仕事をしてらっしゃったそうなんですが、僕もずっと建築の現場で働いていたので、即興性や瞬発力が重要だとよくわかります。そこでの身の振る舞い方はresearchlightにも通じると思います。



危口 統之
Noriyuki Kiguchi

1975年岡山県倉敷市生まれ。99年横浜国立大学工学部建設学科卒業。2008年、演劇などを企画上演する集まり「悪魔のしるし」を組織、現在に至る。2014年度よりセゾン文化財団シニアフェロー。



家成 俊勝
Toshikatsu Ienari

2004年よりdot architectsを共同主宰。建築における設計、施工のプロセスにおいて専門家、非専門家に関わらず、様々な人々を巻き込む、超並列設計プロセスを実践。また建築を専門としながらも他分野の人々との協働プロジェクトにも多く関わる。



RAD
(左から)
川勝 真一
Shinichi Kawakatsu
本間 智希
Tomoki Honma

「建築の居場所 (Architectural Domain)」に関するリサーチ活動を行うインディペンデントな組織として2008年に設立。「建築的なアイデアは「建てること」だけを目指すべきではない」を合言葉に、ではそのとき建築家に、あるいは建築には何が出来るのかをリサーチしている。

劇場と広場、祝祭性と公共圏

—2つのプロジェクトには祝祭性、公共圏の問題が関わっていますが、それはロームシアター京都のような公共劇場が社会に存在するうえで考えるべき命題ですね。

家成：建築史家の神代雄一郎さんが、集落には経済活動やコミュニティ生成を行う社会軸と、祝祭や儀礼による信仰軸の2つがあって、それがうまく機能することで集落が存続すると論じています。僕個人は後者がリアリティを都市部で感じる機会は少ないと感じますが、危口さんが疑問を抱いている永続的なユートピアというのは、ここに関わるものではないでしょうか？

危口：祝祭性や信仰には、楽しいこともあるんですが、危うい部分も多くあります。近代演劇、近代的な劇場は、古来、演劇が持っていた祝祭性を前時代的なものとして切り捨てて生まれたもので、近年多くの演劇関係者が、再び「祝祭性」を口にし始めているのは墮落ではないかと思うこともあります。もちろん歴史には過去に回帰する性質がありますから止めようがないのですが、危うさに対する覚悟は持っていた方がいい。

—しかし演劇が儀礼や祭祀を原点に持つ以上、回帰への危うさは常にあります。そこで重要になるのは、かつての祝祭性を現代の知見で読み替えることではないでしょうか？

川勝：「祭り」は、空間よりも時間に属するものですね。そういう意味では一過性の枠内に祝祭を留める「搬入プロジェクト」は、現代的な視点を持っている気がします。

家成：香川県小豆島に素晴らしい農村歌舞伎の舞台があって毎年歌舞伎が行われます。4年に1回くらいの頻度で各地区の島民たちが持ち回りで歌舞伎を演じるんですよ。歌舞伎の有名な演目演じるんですが、随所に「あそこのスナックで飲みすぎて二日酔いになった」みたいな、島民たちの日常のネタを織交ざって劇が進んでいく。それを見て感じたのは、歌舞伎を演じることが、集落のガス抜きになっているということでした。現実と地続きの部分を持ちつつ、しかし役を演じることで、集落に溜まったガスが抜けて、共同体がうまく機能する。演劇や祝祭には、そういう役割があるのではないかと。

危口：線的な一過性の時間ではなくて、定期的に訪れる循環物として演劇が活用されているってことですね。あと面白いのは、地区毎の持ち回りが、ヒップホップにおけるバトル的な構造を生み出す点です。競争相手がいることで、祭りが継続していく。

—祝祭が様式化・習慣化によって継続性を保つというのは、古来から続く形態ですが、現在であれば映像情報によるアーカイビングも、祭りを継続させる仕組みとして活用できるかもしれません。その意味で、今回の「搬入プロジェクト」で行われた7台のカメラによる記録は興味深いものでした。私自身は3月5日の搬入に実際には立ち会えなかったのですが、映像インスタレーションを見ることで追体験する感覚を強く覚えました。また、それによってロームシアター京都が持っているユニークな建築構造に気づくことができました。3つの劇場を中心に構成されていますが、全体としては大小様々な通路の組み合わせでできている空間で、その連続性は、劇場周辺に向かって圧倒的に開かれている。

危口：アンチスペクタクルな建物ですね。昔の教会や神殿であれば、正面に立派な扉があり、真っ直ぐ入ると突き当たりに祭壇がある。空間そのものが一つのドラマを形成している。でも、このロームシアター京都はどこからでも入れるしどこからでも出ていける。水平に動くことが無言のうちに求められている。それは、ある種のモダンな精神の体現とも言えるんですね。そんな近代的な空間の中に、いまだ前近代性を帯び続ける演劇のための劇場が設けられている。

—一人が参集する場である劇場が、アンチスペクタクルを志向する建物内に含まれているのが面白いですね。しかも、そこに「搬入プロジェクト」というある種の異化作用を持った試みが介入することで、さらに別の表情が露わになってくる。

危口：それは「搬入プロジェクト」が常にもたらす効果のひとつですね。場のサイトスペシフィティを吹っ飛ばして、それぞれRADが祭りを単純に数値だけに還元したようなドライな目線で、建築や空間を再読み込みする。極端に言えば、京都でやろうが、上海でやろうが、搬入は搬入でしかない。

家成：そこ、めっちゃ共感できます(笑)。ドライな視点って大事で、普段建築をやっていると「場のコンテキスト」や「らしさ」を尊重することを、誰に強要されたわけでもないのに、強迫

観念のように自分たちに課してしまう。もっと自由に考えることができるはずなのに、コンテキストによって自縄自縛されている。だから今回のresearchlightの取り組みは、コンテキストをひっぺがすことで子供たちを招くことができた。予想外に反響が大きすぎたのは気になるんですけど、それはドライな視点の効用だったと思います。

川勝：今回僕らRADが求められた「京都らしさ」の捉え方も難しかったですね。現在の岡崎地区は、美術館や劇場が集まる文化ゾーンとして認知されていますけど、明治期に美術工芸の作家が工房を構えたり、戦後に米軍の駐屯地ができたり、琵琶湖疏水の動力を利用した水車工場が林立したりする。一つのイメージに回収できないわけですよ。

本間：その意味で、時代もコンテキストも棚上げして、多様なものが並列的に配置されているresearchlightの試みは、なるほど、と頷ける部分が多かったですね。さらに、週が変わるごとにオブジェもアップデートされて、配置もどんどん変わっていく。改変と更新によって、飽きられない公共性としての強度を高めていた気がします。

危口：子供にとっては、完全に公共化してますね。

川勝：劇場が、祝祭とか少しきわどいものを内部に閉じ込めるものだと、一方で広場っていうのは、公共圏を外部に作り出すもの。

危口：それぞれがそれぞれの名前と顔と、思想を持った上で集まれるのが公共圏なんだと思います。だから、個人が集団の中に溶けていってしまう祝祭と公共圏は、ある意味で敵対関係な訳ですよ。

2016年3月27日に行われた「搬入プロジェクト—京都・岡崎計画—トークイベント」より再構成
構成／島貫泰介



リサーチの成果を議論するRADと学生プロジェクトメンバー

八角教授による解説！

抵抗としての広場／劇場

八角 聡仁 Akihito Yasumi
(批評家／近畿大学教授、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員)



古代ギリシアにおける「アゴラ」が良く知られるように、広場は民主的な世論が形成される場として重要な役割を果たしてきました。討議や集いの場の名称にしばしば用いられる「フォーラム」や「プラザ」も、「広場」を意味する語から発しています。近代の都市文化が成立する過程でも、広場・市場・劇場は、相互に浸透しあいながら、人々が出会い、交わり、議論する場となってきたのです。しかし、それらは現代社会において、いずれも大規模な商業施設に(そしてまたサイバースペースに)取って代わられようとしています。

なぜ公共空間としての広場はいま失われようとしているのでしょうか。もちろんさまざまな要因が考えられますが、根本的には社会から「まわり道」や「遊歩」が排斥されつつあるということでしょう。生産と消費を効率的に進めるためには、目標や結論にできるだけ速くまっすぐに辿り着くことが最大の価値となり、そこから逸脱することは「危険」もしくは「無駄」だと見なされます。それに対して広場が多様な人々の出会いの場となるためには、これといった理由がなくてもそこに立ち寄りたくなるような魅力がなければいけない、あるいは建前としての機能から外れた別の愉しさがなくてはなりません。目的地

に最短距離で到達することだけを考えれば、広場は不要なものとなってしまいます。

たとえば人々が「飲みに行く」のは、単にアルコールを摂取するだけではなく、日常とは異なるコミュニケーションの場を欲するからでしょう。飲み物や料理が美味しいことも大切ですが、それも含めた「場」の心地よさを求めて、カフェや酒場に人は集まるはずですよ。劇場も同様に、上演される作品のみならず、そこで時間を過ごすこと自体に悦びを感じることがなければ、特定の人々の趣味を満足させるだけの文化施設になりかねません。

活気のある魅力的な広場は季節によって、また一日のうちにもさまざまに表情を変えながら、日常と非日常、秩序と賑わいの均衡を複雑に保っています。そこで「現在」を相対化する時間を呼吸できること、すなわち「歴史」を感じとれることも広場には必要な条件です。その意味で、「広場」としての劇場を構想するのにまさしく京都は恵まれた環境にあると言えるでしょう。今日、迂回することの価値(それを知ることは民主主義にとっても不可欠です)や緩やかさの快楽が、教育の場からも排除されているとすれば、劇場こそそうした豊かな体験を提供できる可能性を持っているにちがいない。

highlight MUSEUM

大学の先生が推薦者となって、いま京都から生まれている才能に光を当てます。
今回は、篠原ユキオ先生のご推薦、京都精華大学出身の榊原太朗さんをご紹介します。



「上海対決X」2016年

Comment :

私はマンガ的表現方法を用いて、日本各地のノスタルジックな街並みをモチーフに制作しています。この作品は日本ではなく、初めて中国を題材にしました。意味が分かりそうで分からない漢字の看板の応酬、モノであふれかえり雑然とした様子は、同じアジアの日本と共鳴しつつもまた違った魅力がありました。

この作品もそうですが、最近では浮世絵やゲームといった日本の二次元カルチャーに自身の作品との共通点を感じ、要素を引用して制作することもあります。日本の先達クリエイターに畏敬の念を払いながら、少しでも新たな作品を作りたいと思っています。



榊原 太朗 Taro Sakakibara

1983年静岡県出身。京都精華大学芸術学部マンガ学科カートゥーンコース卒業。在学中より国内カートゥーンコンペで受賞。主な個展に2016年「上海対決」（ギャラリー三条祇園・京都）、2015年「Japan Urban」（いよてつ高島屋・松山）。主なグループ展に2016年「HITOKOMA MANGA SHOW」（マルシリオ・ネアーツギャラリー・イタリア）。2006年より地域密着型アートイベント「オカベトリエンナーレ」を静岡で企画、開催。

推薦者:

篠原 ユキオ Yukio Shinohara (京都精華大学 マンガ学部教授)

彼の描くさまざまな風景は現実の風景にこだわりながら独自の世界を細密なペン画で描いている。登場する人物はどれも強烈な個性のキャラクターぞろいで、彼らが醸し出す人間臭さと相まって、見る者に多重な物語を連想させる。マンガでもイラストでもない新しいタイプの絵画表現として注目している描き手である。



平安神宮と踊る人達

平安神宮前の交差点。信号の向こうで突如踊り出した大学生らしき三人。音楽は鳴っていない。信号のこちらがわで並んでいる仲間らしき面々がゲラゲラ笑いながら手拍子を始める。きつと「ちよつと怒られそう」という楽しさも手伝つてのさだろう、向こう側の踊り手が激しく動きつつ、時折やたら険しい顔で「決め顔」をするたび、見ている側は爆笑している。

例えばこの場所に警備員が立っていたら、こういうことは起きるだろうか。信号の向こうの赤い柵がもつとつかついたら、彼女達はあえてこの場所を選んだのだろうか。逆に、ここに平安神宮がなく、ただの広場だったら、この光景を見ていた僕や他のおじちゃんおばちゃんたちは少しの驚きと共に楽しい気持ちになれたのだろうか。

ズドンと構えたその平安神宮の門の入り口が三つ。その手前で踊る三人。なんの意味も持たないはずなのに、そのギャップと無意味さがおかしい。もちろん、平安神宮も「ここで女子達が踊るために。それを信号の向こうでもつとより多くの女子達が見

るために」と、広場を作った訳ではない。でも、そこに「景色を備えた自由な空間」があったから、こういう微笑ましいことが起きる。

彼女達が楽しんでいるのは、演劇でも使われる「借景」という方法だ。いつも見慣れているもの、自分たちが作り出したものを、すでにある景色の前に存在させてみる。すると、体育館や教室で見ていたダンスとはまた、違った意味合いがあふれてくる。それを、彼女達は産み出したのだ。すげー。

歴史深い場所や物を管理するのは、とても大変だろう。触られちゃ困る仏像に、ガツチリと金網をかけてしまうのは簡単だ。でも、「手の触れられる距離」で見ることが出来てこそ感じられる時空の楽しさを、彼らは信じているのだと思う。時には修学旅行生に、来年には別れてしまうだろう彼氏彼女の相合い傘なんかの落書きをされてしまうこともあるだろうに、京都は懐が深い。阿闍梨餅も美味しい。

写真と文 岩井 秀人 Hideto Iwai

家族、引きこもり、集団と個人、個人の自意識の渦、等々についての描写を続ける注目の劇団ハイバイ主宰、劇作家、演出家。2012年NHK BSプレミアムドラマ「生むと生まれるそれからのこと」で第30回向田邦子賞、2013年「ある女」で第57回岸田國士戯曲賞を受賞。ハイバイは今年5月に、ロームシアター京都オープニング事業として「おとこたち」を上演した。

REPORT はじめてのカンゲキ 03

大学生が「搬入プロジェクト」を体験！

17大学35人の大学生が学生プロジェクトメンバーとして参加した「搬入プロジェクト—京都・岡崎計画—」。2か月間にわたりロームシアター京都の事業に関わった体験を6人の学生メンバーに聞いてみました。

野澤 毎日、ロームシアター京都に通ってたよね。

下寺 行ってたね。

竹川 学校でもないのに、継続的にこんなに同じ場所に通うことになるとは。

廣中 1週間に何回も劇場や美術館に行くことってないよね。

野澤 劇場って作品を見に行く場所だったけど、作品をつくる場所になって、私の中の劇場が今までとは全然違うものになっていった。

竹川 それはあるな。

在間 広報チームはずーっと作業部屋に籠ってました。設計チームは？

竹川 籠ってました。まず最初に劇場のいろんな場所を測ったんだけど、その分、この場所への愛着がすごい。今日も久しぶりに来たから、無駄に劇場内を歩き回って眺めたりして(笑)。

下寺 僕も、搬入プロジェクトが終わってから結構、来てますよ。ぼーっとしたり、カフェでくつろいだり、居心地良いんですよ。

竹川 プロジェクトを通じて印象に残ったのは、アーティストそれぞれの学生との接し方。

福森 大学の先生にもアーティストはいるんだけど、アーティストとしての仕事を大学内で見るとはあまりなくて。アーティストの制作に対するストイックさがすごくて、第一線でやってる人ってこれぐらいやってるんだなということが伝わってきて勉強になりました。

廣中 出された課題に対して答えても、「いや、もっとできるはず!」ってかなり言われましたよ。

福森 私が言われたのは、「君らが僕より努力したら、僕はもっとその先の努力をする」って。

在間 私はタブロイド紙の編集作業に関わりましたが、入稿直前のカツカツ感がプロでもやっぱこうなんだって、現実を見た気がしましたね(笑)。

野澤 アーティストのプロジェクトに学生が関わると、学生が手となり足となり下働きするようなことが多かったけど、今回は、アーティストが学生に対してめっちゃ熱くて。

廣中 学校ともまた違うよね。

野澤 一緒にプロジェクトやってる仲間として扱ってられました。

在間 アーティストも学生も、このプロジェクトをやったなかったら絶対知り合いになっていない人たちとつながって、そのこともでかい。

下寺 あとは、搬入プロジェクトを体験して、劇場ってここまでやってもいいんだ! って思いました。



竹川 あの前川國男の建築を改修した建物に対して挑戦できるってのもいいなと思いました。屋根に上がるとかね!

野澤 ロームシアター京都には、これからも「まさか!」って思うことをやってほしいです。

計画・設計



竹川 康平
神戸大学大学院
工学研究科2年

広報・制作



在間 夢乃
京都工芸繊維大学
造形工学課程4年

展示・記録



廣中 里沙
京都造形芸術大学
情報デザイン学科3年



福森 美紗子
京都市立芸術大学
美術学科3年

リサーチ



野澤 美希
京都造形芸術大学
アートプロデュース学科4年



下寺 孝典
京都造形芸術大学
環境デザイン学科4年

「搬入プロジェクト—京都・岡崎計画—」2016.3.5(土) - 27(日)
P.2 参照

わたしと京都会館

—京都会館の50年を振り返る—

市民やアーティスト、京都会館に関わってきた人々の証言と資料をもとに、
京都会館がこれまで歩んできた時間を紡ぎなおします。



足立 充宏さん

Michihiro Adachi

高校から合唱に取り組み、大学入学を機に京都へ。その年、京都会館で開かれた「京都合唱祭」に出演し、それから約40年間ほぼ毎年のように京都会館で歌ってきた。2002年より京都府合唱連盟副理事長、今年4月よりロームシアター京都副館長を務める。

私たち、検校バレエ団のここぞという時の公演はいつも京都会館でした。今でこそ海外公演をやらせてもらえるようになりましたが、京都会館を拠点にこつこつと海外のダンサーを呼んで経験を積み、活動してきたからです。

旗揚げ公演も京都会館でした。パリ・オペラ座のトップ・ダンサーだったシリル・アタナソフさんと『ジゼル』を踊りました。その時、森下洋子先生に「すごいダンサーと踊るけど、舞台上では対等にやらない」と言っていたが、不安だった気持ちが吹っ切れたのを覚えています。検校版白鳥の湖『オデット』を2000年に上演した時には、第一ホール内にエレベーターができたということで、記念のテープカットにも参加させていただきました。年に2回の大事な公演のリハーサル直後で正直大変だったのですが、それも今となってはちょっとおかしな良い思い出です。

旗揚げ公演からちょうど30年、今年、ロームシアター京都で上演できることにもまたご縁を感じています。



小西 裕紀子さん

Yukiko Konishi

京都市に生まれ、6歳でバレエを始める。検校バレエ団の主演、振付家として国内、海外公演を積極的に展開。今年11月にはロームシアター京都メインホールにて、昨年、フィレンツェで上演した『椿姫』の凱旋公演を予定。



「ジゼル」(1986年)舞台写真



テープカットに参加する小西さん
(写真右から2人目)



2011年「京都合唱祭」満席の客席(当時の第一ホール)

思い出は数えきれないほどありますが、京都会館閉館前、最後となった2011年5月の「京都合唱祭」は印象深いものになりました。同年3月に起きた東日本大震災に際して、京都府合唱連盟として何か支援できないかと福島県の合唱連盟に持ち掛けたところ、「嬉しいお声がけだけど、ホールが使えず合唱ができない。今はせっかく練習してきた高校生の歌声を発表する場がなくて困っている」という返答でした。そこで基金を募って、福島の高校生を合唱祭に招待しました。会館前の二条通で、高校生が乗ったバス4台が到着するのをみんなで待ち構え、拍手で出迎えると、高校生たちも涙して喜んでくれました。本番は立ち見が出るほどの盛況、このとき初披露された「ころよ うたえ」は、復興を象徴する合唱曲として、その後、全国で歌われています。また、招待した高校生のひとりはいま京都の大学で学んでいて、今年5月からロームシアター京都に会場を戻した「合唱祭」に出演してくれたことも嬉しい再会となりました。

これからも多くの出逢いと感動が生まれる場として、皆さんに愛着を持っていただけるロームシアター京都であってほしいと強く望んでいます。



福島の高校生の到着を待つ(2011年「京都合唱祭」)

ロームシアター京都とは

2016年1月10日、50余年にわたり親しまれた京都会館がリニューアルオープン。京都市に本社を置くローム株式会社と京都市が50年間の命名権契約を結び、「ロームシアター京都」という新しい名を得て、京都における文化芸術の創造・発信拠点として人々の暮らしと芸術がつながる新しい「劇場文化」をつくり出す。

お問合せ ロームシアター京都

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL:075-771-6051(代表)
FAX:075-746-3366
<http://rohmtheatrekkyoto.jp/>

highlight vol.04

編集ディレクション：竹内厚
アートディレクション・デザイン：山田正江
編集：ロームシアター京都(橋本裕介、武田知也)
発行：ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
発行日：2016年7月1日(金) 禁・無断転載

PICK UP

東京音大・京都芸大による 吹奏楽の祭典 in KYOTO!

2016.7.10 (日) 14:00開演 / 13:30開場

その緻密なサウンドに楽界から注目を浴びる京都市立芸術大学の吹奏楽が、東の吹奏楽界の雄・東京音楽大学をゲストに迎え、広上淳一と増井信貴の指揮の下、心ひとつに音楽の喜びを謳いあげます。

【曲目】

■ 東京音楽大学 ジェイムズ・バーンズ/交響曲第3番作品89 指揮：広上淳一(東京音楽大学 教授) 演奏：東京音楽大学シンフォニック ウインド アンサンブル
■ 京都市立芸術大学 ビーター・グレイム/大学祝典ファンファーレ フィリップ・スパーク/宇宙の音楽 指揮：増井信貴(京都市立芸術大学 教授)
演奏：京都市立芸術大学シンフォニック ウインド アンサンブル ■ 合同演奏 フィリップ・スパーク/陽はまた昇る ヤン・ヴァン・デル・ロースト/アルセナル

チケット 全席自由 一般1,500円、学生1,000円 ロームシアター京都チケットカウンター TEL: 075-746-3201、ほか

会場 メインホール **お問合せ** 京都市立芸術大学 連携推進課 事業推進担当 TEL 075-334-2204(平日8:30-17:15)

主催：京都市、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市立芸術大学、東京音楽大学
後援：京都市立芸術大学音楽教育後援会

京都市立芸術大学と
東京音楽大学の吹奏楽の競演!



比べてみよう

東京音楽大学 & 京都市立芸術大学

Ⓘ 東京音大 Ⓚ 京都芸大

夢の競演の前に、両大学にそれぞれ共通の質問を投げかけてみました。
この日ならではの出会いからどんなサウンドが生まれるのか、とても楽しみです。

Q. 出演を予定している団員数

Ⓘ 73名 Ⓚ 84名

Q. その男女比率

Ⓘ 22:51 Ⓚ 28:56

Q. 吹奏楽の主な指導者

Ⓘ 講座主任は水野信行。その他に、菅原淳、津堅直弘、小串俊寿、外園 祥一郎、時任康文
Ⓚ 増井信貴、大嶋義実、山本毅、村上哲、若林義人、上田希、國末貞仁

Q. 練習日と練習時間

Ⓘ 基本的には月曜14:30-17:00の吹奏楽Aの授業で練習しています。
Ⓚ 毎週水曜日の「管打楽合奏」の授業(13:00-14:30)と、7月5日の特別練習(17:00-21:00)。

Q. 演奏機会の多い作曲家

Ⓘ あらゆる作曲家の作品を勉強します。
Ⓚ 古典から近現代までの作曲家全般。

Q. 演奏の特徴

Ⓘ 今回の奏者は73名ですが、普段の授業や定期演奏会は145名の大人数でダイナミックな演奏をしています。
Ⓚ 少人数による誠実で温かい演奏。

Q. 活躍する主な卒業生

Ⓘ 2015年日本音楽コンクール クラリネット部門1位・勝山大輔、2015年日本管打楽器コンクール トロンボーン部門1位(特別大賞)・森川元気、2014年ITEC国際ソロコンペティション テューバ部門1位・宮西純、他多数。
Ⓚ 菊本和昭(N響首席トランペット)、玉木優(南デンマークフィル 副首席トロンボーン)、次田心平(読売日本交響楽団チューバ)、他多数。

Q. 2016年度の演奏予定

Ⓘ 7/14「第47回 定期演奏会」、9/25「東京音楽大学が奏でる癒しの森コンサート」、10/16「特別演奏会(長野県岡谷市)」、他。
Ⓚ 12/11(日)第153回定期演奏会 G.フォーレ「レクイエム 二短調 op.48」 D.シヨスタコーヴィチ「交響曲 第5番 二短調 op.47《革命》」、他。

Q. 今回の演奏会で特に注目のプレイヤー 3人

Ⓘ クラリネット・吉川清香…コンサートミストレスとして楽団をけん引します。チューバ・山内嗣大…1楽章の冒頭はチューバのソロで始まります。ホルン・深江和音…3楽章のメインテーマをソロで演奏します。
Ⓚ ホルンやサクソで特徴的な音楽を奏でますが、個々の演奏家の名は控えたいと思います。

Q. 相手の楽団にひと言

Ⓘ 「少数精鋭の方々が集まっているので繊細かつ緻密なサウンド」(インスペクター・葛西修平)。「京都市芸の皆さんは、とても気さくで暖かく、学年を問わず誰とでもすぐに馴染める雰囲気、やさしい方々だと感じました。私たちが京都市芸さんのような素直な音で大人の演奏がしたいと思います」(コンミス・吉川清香)。
Ⓚ 「シンフォニックでダイナミックな演奏に加え、繊細な表現も素晴らしいです」。

京都の若手アーティストが見た!

ロームシアター京都 オープニング事業

能楽特別公演～伝承日本人の心～

能楽特別公演～伝承日本人の心～ 2016年1月10日(日)/サウスホール

能「翁 附キ 養老」片山九郎右衛門(三番三 茂山正邦)/狂言「末広がり」茂山千五郎/能「羽衣」金剛永謙/能「船弁慶」井上裕久・浦田保浩

まだ能楽が庶民にとって“同時代演劇”だった中世、能と狂言は野外で終日上演されていた。今でいう野外フェスのようなものだったのだろうか。能楽堂という建物で、それも仕事帰りに楽しめるようなコンパクトな能狂言の公演に慣れた現代の私たちには想像しがたい光景だ。しかし、能四曲に狂言一番という大ボリュームで繰り広げられたロームシアター京都サウスホール舞台開き「能楽特別公演～伝承日本人の心～」は、そんな、かつての能楽の鑑賞法を夢想させる楽しみにあふれていた。

まずは「翁」。能の大成者・世阿弥の頃から、興行の幕開きやお正月に必ず上演されてきた祝禱儀礼だ。物語らしきものはなく、神々が次々に現れ、ひたすら寿ぎを祝する。まず「翁」という最高神が「とうとうたり…」と呪文めいた謡をうたう。次に「千歳」という神が、「鳴るは滝の水、鳴るは滝の水…」という言葉を残す。最後に「三番三」という三神のうち最も庶民的な神が、「よろこびありや、よろこびありや」と予祝しつつ勇壮に登場し、賑やかに地を踏み鳴らす。これはさながら神々の伝言ゲームで、翁の「とうとうたり…」という意味不明な言葉を、千歳が「とうとうと流るる滝の音のことですよ」と解説する。それを受けて三番三が「めでたい!滝の水のように、我々の喜びも枯れることがないでしょう」とまた解説してくれる。先者の言葉

や行為を引き継ぎつつ、解きほぐしたり、真似たり、時に風刺や揶揄を加えることを芸能用語では「もどく」というが、能狂言は、このモドキの精神を身上とする。そのことが四曲一番の連続上演から非常によくわかった。

例えば、『翁』の次に上演された能『養老』。『翁』における「滝」のイメージが美濃の国の(養老の滝)一不老と健康をもたらす聖なる滝一に変化する。御代万歳を寿ぐ舞の背景に、激しい飛沫を上げて光輝く滝が見えるようだった。

狂言「末広がり」は、末広がり(扇)を買うようにと主人に命じられた冠者(家来)が間違えて傘を買ってくる喜劇である。そもそも傘は「水」と縁が深く、クライマックスで冠者が謡う「傘をさすなる春日山、これも神の誓ひと…」という囃子物もおめでたい内容だ。『翁』『養老』で神々によって行われた「水」をキーワードとした寿ぎの儀式は、喜劇という形で、はじめて庶民たちの手で執り行われる。

能「羽衣」は、駿河国、三保の松原を舞台とした、天人と人間(漁夫)の交流のドラマだ。それぞれ独立していた神々の世界と人間界の境界線が滲み、神と人が苦喜を共にする。滝は川になり、やがて海へと姿を変えて、広い白砂青松の浜辺が、天人と人間をやさしく包み込んでいた。その海原は、能「船弁慶」で戦場になる。本作の後場は下関・壇ノ浦で源平合戦に敗れた平家総大将・平

文・木ノ下裕一 Yuichi Kinoshita

木ノ下歌舞伎主宰/1985年和歌山市生まれ。2006年、古典演目上演の補綴や監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を立ち上げ、様々な演出家を起用する上演スタイルが注目を集めている

知盛の亡霊が主人公であり、かつての大規模な海上戦が回想、再現される。神からの聖なる恵みだった「水」は、修羅の戦いで無残にも朱に染まってしまう。なんと愚かしく、また儂いものであろう。

それぞれ個別に成立している四曲一番を通して鑑賞すると、まるで全体が「大きな物語」を紡ぎ出しているように感じられる。神々の世界から養老、三保の松原、瀬戸内海へと舞台は日本列島を東西に横断し、神々から人間、幽霊までもが登場する。「水」は聖なる滝、川、海原となり、血の海に転じる。テーマを巧みに変奏しながら、神羅万象、天上から海中までの“大世界”を描き切る。私たち観客は、能狂言に誘われて大きな旅に出たのだ。かつて日本人が有していた宗教観・世界観に支えられた世界を、また現在は失われた美しい自然や過去の景色を、肌身で感じることで、いわば“想念の旅”である。私は古典の威力をまざまざと感じ、ひどく興奮した。

震災や災害を経て、数年後にはオリンピックを控える転換期の我が国では、街の景色も、人々の心の在り方も様々に変化し、無数の分岐点を迎えるだろう。その際に、そもそも私たちの先祖は、どのような世界を、景色を、心を有していたのかを振り返ってみたい。それは、古典が教えてくれるのだ。